

プラント状況確認結果(令和3年12月29日～令和4年1月4日)

令和4年1月5日
福島県原子力安全対策課

令和3年12月29日～令和4年1月4日までの期間に、東京電力から福島第一原子力発電所のプラント状況に関する報告内容について、県が確認した結果は次のとおりであり、前回の報告から大きな変動はありません。

プラント状況(1月4日午前11時)

以下の項目について、実施計画*に定める制限を超える測定値はありません。

また、県の檜葉町駐在職員が福島第一原子力発電所中央操作室にてプラント状況を確認しています。確認結果はこちら([県HP](#))を御覧ください。

場所	目的	監視項目*	1号機	2号機	3号機	4号機 ^{※2}
原子炉 ^{※1} (核燃料)	冷却	注水量(m ³ /h)	3.4	2.5	1.6 ^{※3}	—
		圧力容器 底部温度(°C)	17.8	23.6	25.2	—
	未臨界確認	キセノン135濃度 (Bq/cm ³)	7.90×10 ⁻⁴	検出限界値 未満	検出限界値 未満	—
圧力容器	水素爆発防止	窒素充填	充填中	充填中	充填中	—
格納容器		水素濃度 (体積%)	0.00	0.06	0.08	—
使用済燃料 プール	冷却	水温(°C)	19.8	19.2	— ^{※4}	—

※1 直近データのみ記載。詳細は[東京電力のページ](#)を御覧ください。

※2 4号機は原子炉及び使用済燃料プールに核燃料が入っていないため冷却等は必要ありません。

※3 作業に伴い原子炉注水量を変更しています。安全性に影響はありません。

※4 全燃料取り出し完了により、計測不要です。

(1) 発電所敷地境界におけるモニタリングポストの測定結果(1月4日午前10時)

最小 0.352(MP-6)～最大 1.076(MP-4) μSv/h ⇒ [計測地点の地図](#)

(2) 発電所専用港内の海水中セシウム137濃度の測定結果(1月3日採取分)

最小 検出限界値未満 ※検出限界値は約0.56 Bq/L(港湾口)

～最大 2.0 Bq/L(遮水壁前)

⇒ [計測地点の地図](#)

(3) 発電所専用港外(沿岸)の海水中セシウム137濃度の測定結果(1月3日採取分)

5、6号機放水口北側：検出限界値未満 ※検出限界値は約0.71 Bq/L

南放水口付近：検出限界値未満 ※検出限界値は約0.87 Bq/L

⇒ [計測地点の地図](#)

(4) 発電所敷地内の大気中セシウム137濃度の測定結果

敷地境界に設置されている連続ダストモニタにより24時間連続で監視しております。測定結果はリアルタイムで公開されていますので、こちら([東京電力HP](#))を御覧ください。

(5) 1～6号機タービン建屋付近のサブドレン水中セシウム137濃度の測定結果(12月31日採取分)

最小 検出限界値未満 ※検出限界値は約5.3Bq/L (5号機)
～ 最大 3500 Bq/L (2号機)

トラブルの概要(令和3年12月29日～令和4年1月4日)

この一週間におけるトラブル等について、東京電力から以下のとおり報告を受けました。

■ 4号T/B東側付近における水溜まりの発見について

本日(12月29日)午後3時29分頃、4号T/B東側付近で水溜まりがあることを協力企業作業員が発見しました。

状況は以下のとおりです。

- ・発生場所(設備名称) 4号T/B東側付近
- ・漏えい箇所 4号T/B東側付近
- ・漏えい範囲 約1m×約10m

当該水溜まりのスミア測定を実施したところ、バックグラウンドと同等であり汚染が無いことを確認しました。

現在漏えいは停止しており、漏えい拡大の恐れはありません。

詳しくはこちら [\(1\)](#) [\(2\)](#) ご覧ください。

■ モバイル淡水化装置の配管保温材からの水の滴下について

本日(12月30日)午前11時25分頃、H1東タンクエリア付近モバイル淡水化装置の配管保温材から水が滴下していることを協力企業作業員が発見しました。

状況は以下のとおりです。

- ・漏えい範囲 約60cm×80cm
- ・漏えい継続の有無 20秒に1滴程度で滴下が継続している

当該保温材を取り外し、内部を確認したところ、配管からの漏えいはなかったことから、配管保温材に浸入した雨水であると判断しました。

詳しくはこちら [\(1\)](#) [\(2\)](#) ご覧ください。

* 実施計画及び監視項目に関する解説

○実施計画

正式名称は「福島第一原子力発電所特定原子力施設に係る実施計画」。東京電力の廃炉の取組（設備設置含む）について、原子力規制庁が安全性の審査を行い認可したもので、事業者の安全上守るべき基準値等が示されています。

○注水量及び圧力容器底部温度

1～3号機の原子炉格納容器内に存在する溶け落ちた燃料（燃料デブリ）を冷却するため、継続的な注水を行っています。実施計画では原子炉圧力容器の底部温度を80℃以下で管理することを定めています。

○キセノン 135 濃度

キセノン 135 はウランが核分裂する過程で生じる放射性物質であり、量によってどの程度核分裂が起きているか推定することができます。実施計画では1 Bq/cm³以下であることが定められています。

○窒素充填及び水素濃度

水素爆発防止を目的に、原子炉内の水素濃度を測定し、実施計画に定める制限値（2.5%）よりも低いことを確認しています。1～3号機では、原子炉格納容器に窒素を注入することにより水素や酸素の濃度を下げています。

○水温

使用済燃料プールの水を循環冷却することにより、プール水温を管理しています。なお、実施計画では60℃（1号機）または65℃（2、3号機）以下で管理することが定められています。

（お問い合わせ 024-521-7255）